

2018年4月10日

日本ロレンス協会会长 浅井 雅志
日本ロレンス協会副会长 田部井 世志子

会員の皆様におかれましては、お変わりなくご健勝のことと存じます。

さて、2018年度の日本ロレンス協会第49回大会は、井出達郎先生のご尽力で6月30日（土）、7月1日（日）に仙台の東北学院大学土樋キャンパスで開催されます。

まず6月30日は、山田 晶子氏の「ヘプバーン大尉の“passional changes”——「大尉の人形」に見られるロレンスの新しい男女関係の希求——」で幕をあけます。ヘプバーン大尉の説く“honour and obey”と「星の均衡」の思想との関係、あるいは“doll”が象徴するものを中心に、「狐」、「てんとう虫」と比較しながら新たな読みを提示されます。続くシンポジウム「ロレンスに触れる——象徴、劇場、写真」は、新井英永氏の司会と構成で、視覚中心主義に抗する形で生じてきた「触覚論的転回」とでも呼ぶべき文脈の中で立ち現われてきた、視覚／触覚という対立の観点から、従来の精神／血、言葉／肉体等のロレンス的二項対立を再考し、新たな読み解きを提示するというきわめて野心的なものです。講師の井出達郎氏は「偶有性への触発——D. H. ロレンスとキメラの象徴」、星久美子氏は『ロスト・ガール』再読——ライブ・パフォーマンスと映画、そして人間の知覚」、そして高村峰生氏は「モダニズムにおける「快楽」と「本物性」——ロレンス、ブルースト、写真」というタイトルのもとに、それぞれ独自の観点から刺激的なお話をされると思います。フロアとの活発な質疑応答を期待します。

続いて総会が開かれますが、多くの会員の出席をお願いいたします。

7月1日には、大田信良氏の司会・構成で、ワークショップ「オクスフォード英文学と冷戦期の／ポスト帝国日本の「英文学」——F·R·リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件とは？」が行われます。ここでは、第2次大戦後に復興した日本の「英学」、あるいはポスト帝国日本の「英文学」を、リーヴィスが解釈・評価したロレンスおよびロレンス研究との関係に注目し、戦後あるいはすでにこれまで論じられてきた「アメリカの影」のみならず、「帝国イギリスの影」を前景化することで、モダニティという条件のもとにある日本の歴史を新たにグローバルな空間性に開いたうえで捉え直すという、これもきわめて刺激的なものです。大田信良氏は「オクスフォード英文学こそが F·R·リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だったのか？——「グローバル冷戦」におけるポスト帝国日本の「英文学」とロレンス研究」、高田英和氏は「偉大なる伝統の創出？——F·R·リーヴィスとスコットランド文学の分離」、そして外部からお招きした川田潤氏は「文学と科学の対立を歴史化する」のタイトルで、それぞれに興味深いお話を聞かせていただけると思います。こちらも議論が大いに盛り上がることと思います。

会員の皆様は、同封の葉書にて、大会・懇親会の出欠を、役員の皆様は併せて役員会（6月30日（土）午前10時半より、東北学院大学）の出欠を、5月19日までにお知らせいただければ幸いです。よろしくお願ひ申し上げます。

その他、協会執行部より、幾つかのお願いと報告をさせていただきます。

1. 会費納入は同封の郵便振替用紙をご利用ください（手数料は協会負担）。会費は、一般会員は5,000円、役員は10,000円（但し顧問と退職した役員は5,000円）です。
2. 専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない日本ロレンス協会会員に対して、日

本ロレンス協会大会で研究発表（シンポジウム講師等の担当を含む）をする場合、協会で旅費・宿泊費の補助を行う制度があります。詳細については協会ホームページをご覧いただき、ご活用ください。

3. 同封の会員名簿の住所・所属等に変更がある場合は、返信はがきでお知らせください。e-mail アドレスも併せてお知らせいただければ幸いです。

4. 今年の3月29日～31日にUniversity Paris Nanterre in Nanterre, Franceで、“Resisting Tragedy”の総合テーマのもとに国際ロレンス学会が開催されました。今回わが協会からの参加は浅井だけですが、またご報告できればと思います。

それでは、皆さん、初夏に東北学院大学でお会いしましょう。